

シイタケ生産の地域的特徴と経営的性格

八 巻 聡

(福島県農業試験場)

Regional Quality of Shiitake (*Lentinus edodes* Sing.) Cultivation and its Managerial Characteristics

Satoshi YAMAKI

(Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

近年におけるシイタケの需要は、国民所得の向上を背景とした食生活の多様化の進展に伴い急激な伸びを示しているが、生産面においても需要の伸びに対応して増大している。この生産量の増加をもたらした背景を生産サイドからみると、栽培技術や品種改良など、シイタケ生産の技術革新による生産の内延的拡大と共に、外延的拡大が認められる。すなわち、冬期間の労働力利用としての薪炭生産から、その代替燃料の普及によりシイタケ生産への移行が行われたことが、供給量増大をもたらした過程の中で高く評価できる。本報告は、福島県におけるシイタケ生産の特徴を地域的にとらえながら、その経営的性格について明らかにしたものである。

2 シイタケ生産の概況

本県におけるシイタケ生産は、全国有数の優良原木生産地として飛躍的な伸びを示しており、生産量では群馬、茨城に次いで全国第三位の位置にある。

本県における主な生産地は、霊山町、月舘町、常葉町、埴町、矢祭町及びいわき市山間部など、阿武隈山間地帯に多く分布しており、中でも、いわき市並びに霊山町では年間400tを越す生シイタケが生産されている。そして、これらの地帯では生産農家数と共に生産農家1戸当たりの生産量も他の地域と比較して多く、シイタケ部門を経営組織の中で基幹部門として位置付けている農家が多いことを示している。

3 シイタケ生産の地域的特徴

本県におけるシイタケ生産は、地帯によって次のような特徴がみられる。

(1) 生シイタケの月別生産量

いわき市山間部や霊山町など阿武隈山間地帯では、6～8月の生産が若干少ないほかは各月ともほぼ平均してシイタケが生産されているが、この地帯は高温性及び低温性菌種の組合せによるシイタケの周年生産体系の導入しやすい地帯であると思われる。

一方、浜及び中通り地帯では、1～2月及び11～12月の冬期間の生産量が多く、シイタケ部門を農閑期の労働力利

用による換金作物として位置付けており、とりわけ中通り南部はこの傾向が強く現われている。

(2) シイタケ生産農家の規模

シイタケ生産農家の規模をほだ木保有本数でみると、中通り南部並びに阿武隈山間では他の地帯に比較してシイタケ生産規模の大きな農家が多くみられ、とりわけ中通り南部地帯で顕著である。これに対して、浜並びに会津地帯では小規模農家が多く、中でも会津では5,000本未満の小規模農家が80%を占めている。

(3) シイタケの出荷先

シイタケの出荷先としては各地帯とも農協が最も多く、次いで青果市場の順となっている。しかし、阿武隈山間並びに会津地帯では生産量のほぼ全量を森林組合に出荷している町村があり、流通組織として森林組合が関与している点が山村地帯の特徴である。

(4) 原木入手方法

中通り南部並びに会津では原木を自給している農家が多いが、浜通り並びに中通り北部では購入している農家の方が多くなっており、中でも中通り北部では原木を購入している農家が80%を越している。また、阿武隈山間では自給農家と購入農家がほぼ半数ずつ存在している。原木の購入は、山林を所有していない農家に限らず山林所有農家でも一般的に行われており、これらの農家では、将来の原木需給状況を考慮して自家所有原木林をストックしているものと考えられる。

(5) 経営類型

シイタケ生産農家の経営類型を地帯別にみると、浜通り地帯においては畜産+水稻+シイタケ、水稻+養蚕+シイタケが多く全体の60%、中通り北部においては水稻+果樹+シイタケ、水稻+野菜+シイタケが全体の半数を占め、会津においては水稻+野菜+シイタケの1類型だけで全体の約70%を占めている。これら3地帯では農家の1、2の類型への偏りがみられ類型の数も少なく、阿武隈山間や中通り南部とは対照的である。

以上のように、本県におけるシイタケ生産は立地条件から浜通り、阿武隈山間、中通り北部、中通り南部、会津の五つの地帯に区分することができる、シイタケ生産に関してそれぞれ地帯別に特徴がみられる。

4 経営的 性 格

(1) 栽 培 型

本県におけるシイタケ栽培の主な栽培型は、4～5月にほだ場でシイタケを自然に発生させる自然栽培、夏季に発生操作を加えてシイタケを生産する夏栽培、秋季に発生操作を加えてシイタケを生産する秋季不時栽培、冬期間に発生舎を使用して生産する促成栽培の四つの型である。

自然栽培は、生シイタケの生産を目的とする場合には投下労働や資本が四つの栽培型の中では最も少ないが、シイタケの市場出回り量が多く販売価格が安いいため生シイタケ価格の推移を考慮しながら、多くは乾燥シイタケにされる。生シイタケ収量は250kg(ほだ木1,000本当たり)、乾燥歩留りは10～25%と環境差(収穫時期や自然条件など)、品種差があるが平均では約15%で、乾燥(水分13%以下にする)後の重量では37.5kgになる。乾燥シイタケの販売価格は、時期的変動は少ないものの品質による格差が極めて大きい。したがって、乾燥シイタケを生産する場合には、気象条件を考慮した適期収穫が重要なポイントになる。

一方、夏栽培は、1本のほだ木を1夏に2, 3回転するため7～8月に多くの労働を要することと、夏季にほだ木を浸水するためほだ木の腐朽が早く、経済生産年限が短いことが特徴である。

秋季不時栽培も降雨の少ない場合にはほだ木を浸水するため労働投入量は自然栽培よりも多くなる。収穫期は11月上旬からで、収量は自然栽培よりも10～12%少ない。

促成栽培は発生操作により一冬に2, 3回転行うため労働投入量は最も多いが、その時期は冬期間であるため労働投入はしやすく所得が高いなどの特徴がある。しかし、会津地方など積雪の多い地方での栽培は作業が困難である。

(2) 労働投入量

労働投入量の最も少ない栽培型は自然栽培の82時間、次いで秋季不時栽培の113時間、夏栽培の194時間、最も労働投入量の多い栽培型は促成栽培の302時間である。

作業別では、ほだ木の浸水や芽出しなど、発生操作のほとんど必要としない自然栽培や秋季不時栽培では収穫作業時間が最も多く、全体の40～50%を占めている。他方、夏栽培や促成栽培は発生操作を必要とするため、その作業時間が最も多く、全体の48～50%を占めており、これらの作業が栽培規模を規定する一要因となっている。すなわち、シイタケの収穫適期は極めて短く、とりわけ乾燥シイタケを目的にする場合には収穫時期による品質差が大きいいため適期収穫が重要となり、規模の適正化が要求される。

(3) 収 益 性

最も収益性の低い栽培型は自然栽培の乾燥シイタケであ

るが、乾燥シイタケは、前述のように品質による価格差が極めて大きい。ここに示してある乾燥シイタケの販売単価は調査農家の平均であり、良質の乾燥シイタケの場合には7,000円/kg以上を実現することも可能である。したがって、乾燥シイタケの収益を高めるためには適正規模に基づく栽培管理の適正化による良質シイタケの生産が重要である。

夏栽培は、シイタケの生産時期が春季の自然発生時期に次いで市場価格が安くなる時期であるが、収量が多いため所得は比較的高く、1日当たり4つの栽培型の中で最も高い所得を実現している。

秋季不時栽培は、収量は少ないが販売価格が比較的高く経営費も少ないため所得は高位である。1日当たり所得は、夏栽培に次いで高い。

促成栽培は、生シイタケの市場価格の高い時期に収穫期が合致するため所得は最も高くなるが、労働投入が多いので1日当たり所得は比較的低位である(表1)。

表1 シイタケの収益性 (ほだ木1,000本当たり)

項目 \ 栽培型	自然栽培 (乾燥 シイタケ)	夏 栽 培	秋 季 不時栽培	促成栽培
収 量(kg)	37.5	400.0	220.0	350.0
粗 収 益(円)	159,038	374,000	218,240	420,000
経 営 費(円)	102,733	117,176	80,241	162,608
流 通 経 費(円)	11,140	96,870	54,595	69,300
所 得(円)	45,165	159,954	83,400	188,092
1日当たり所得(円)	4,464	6,596	5,894	4,983
ほだ木の経済 生 産 年 限	4 年	2 年	4 年	3 年

5 む す び

以上のように、シイタケ栽培は各産地の置かれている条件、とりわけ自然条件に強く規制されるが、同時にそれらの自然条件を有効に活用することができる。すなわち、耕地面積の少ない農山村地帯であっても山林原野をほだ場として土地の有効利用を実現することができると共に、気温によって品種を変え、収穫時期をずらしていくことによって周年生産技術の体系化が可能であり、阿武隈山間地帯はこれらの条件に合致した地帯であるといえよう。そうして、それは個別経営の中で生産部門の経営規模拡大を可能にし得る重要な部門として位置付けられる。

このほかに、シイタケには商品としての特異性も認められ、シイタケの生産量が多く、生価格の安い場合には乾燥物にすることができ、シイタケ栽培を経営的に安定させることを可能にしている。